

<日本レジャー・レクリエーション学会第 41 回学会大会

地域研究報告 於：大分大学>

大分県における障害者スポーツ・レクリエーション動向
—九州から世界へのホットムーブメント—

堀川 裕二¹

A trend of adapted sports and recreation in Oita
— The hot movement from Kyushu to the World —

Yuji Horikawa¹

2011年11月18日(金)13時より、日本レジャー・レクリエーション学会第41回学会大会第1日目のプログラム「地域研究」が、社会福祉法人「太陽の家」サンスポーツセンターにて行われた。

当日は、15名の学会員が参加し、大分県における障害者の就労や生活支援、さらにはスポーツ支援を行ってきた「太陽の家」の歴史に関する講演、また当該施設の見学により操業の様子を肌で感じる機会を得た。

以下では、「太陽の家」職員堀川裕二氏の講演内容について紹介する。

1. はじめに

太陽の家は、中村裕先生が作られました。その中村先生は57歳という若さで亡くなってしまったのです。太陽の家ができて20年ぐらいの時です。太陽の家に勤められている時から発病されていたのですが、必死の思いでやってこられたわけです。私事なのですが、もうすぐ私は54歳になります。そこでふと思ったのが、あと3年で中村先生の歳だな、ということです。あと3年で何ができるかということを考えまして、私は、あと3年の間でまだ障害者スポーツで行ったことのない県全てに行きたいということを目指して活動させていただいております。

本日は太陽の家ができるまでの経緯、そしてど

のようにして大きくなっていったのかといったこと、それから障害者スポーツの発展や課題について話をさせていただきたいと思います(写真1)。



写真1 太陽の家で行われた堀川氏の講演風景

2. 社会福祉法人 太陽の家の誕生と発展

まずは「太陽の家とは何か」というところからご説明したいと思います。

昭和30年代のはじめ、当時の厚生省は障害者のリハビリテーションを重視し始めました。そこで、中村先生は欧米へ勉強に行かれました。当時のアメリカには、多額のお金をかけて機械など様々な物を導入した大変良い施設はあったのですが、当時の日本では実現できそうもありませんでした。一方、イギリスには、ストーク・マンデビル

という、国立の脊椎損傷センターがありました。そこに、リハビリテーションの第一人者であるグットマン先生がいらっしゃいました。中村先生がグットマン先生を訪ねてみると、陸上競技やアーチェリー、卓球などのスポーツを取り入れたリハビリをしていました。当時の日本では考えられないことでした。イギリスで運動を取り入れたリハビリをしていた理由は、「精神的にも肉体的にも強くなっていかなければ社会復帰はできない」という精神にありました。

中村先生はこの精神を日本に持って帰り、ちょうど今から50年前の1961（昭和36）年に、大分県で身体障害者体育大会を開催しました。これは、日本の障害者スポーツの歴史の中で、初めて正式ルールにのっとった大会だったと言われています。ところが、当時のマスコミは、「障害者を見世物にする」と非常に非難したようです。それでも、中村先生はなんとか切り抜けました。その後、1964（昭和39）年に東京オリンピックが開催されました。東京オリンピックの後には東京パラリンピックが行われました。東京パラリンピックでは、日本の選手が約50人参加しました。その選手のほとんどは、入院患者さんなどだったので、試合をするとボロ負けしてしまいました。体格差も当然ありますが、別の点で強さが違うと考え、日本選手が欧米の選手に理由を聞きました。そうすると、欧米ではほとんどの選手が社会に復帰して、働いていることが分かりました。「これでは勝てるはずがない」ということで、日本選手団の団長をされていた中村先生が、「僕らも働かなければならない。なんでもいいから働くところをつくろう」と考え、その1年後に出来たのが太陽の家なのです。

太陽の家をつくりましたが、最初はほとんど仕事がありませんでした。やっている仕事はもう内職程度しかありませんでした。それでも他に働く場所はないから、日本全国から、障害者の方が太陽の家にどんどん来たのです。当時は障害の重さに関係なく、仕事が無かった訳です。それから数年経った昭和45・46年になると、太陽の家も大きくなってきて、それなりの仕事ができるようになりました。

3. 太陽の家と福祉工場

1972（昭和47）年には、「訓練生ではなくて、しっかりとした労働者にならなければならない」と考え、福祉工場ができました。この福祉工場には、2つの大きな特徴があります。

1つ目は、「共同出資会社」という特徴です。太陽の家とオムロンとがお金を出し合って、「オムロン太陽」という会社をつくりました。仕事の面倒はオムロンがみて、太陽の家は健康面や生活面、スポーツなどのお世話をする。このような分業が、非常にうまくいったと思います。オムロン太陽という会社は、当時2,000万から3,000万円ぐらいの資本金が平均的なところを500万円ぐらいに押さえて、障害者の持ち株比率を高くしました。だから、障害者にとっても自分の会社になったわけです。そうすると、自分のために頑張って働かなければならないという強い意志が生まれます。自分たちの会社だという気持ちが、成功した要因になったと思います。

2つ目の特徴は、「ライン作業」です。何か機械を作るラインがあるとします。その場合、脳性麻痺のアテトーゼという付随運動がある人でも、一番大きな外側の部品だったら、箱から取り出してラインに乗せることができます。それが流れていって、次にその中に小さな部品を入れていきます。そこでは例えば片麻痺の人で右手は使えないけれど、左手は大丈夫だという人が細かい部品を入れます。それでは、両手が使えない人はどう仕事をするかということ、目を使うわけです。流れてきたものを検定するのです。流れてきた製品に何らかの不備があれば、自分で取ることはできないので、足でペダルを踏むとか、頭でボタンを押すという方法で、不備のある製品をラインからはずすのです。この「ライン作業」が非常に成功しました。障害者が働くということは、残された機能で働くということです。足が使えない人は足にこだわるのではなくて、使うことのできる手で頑張ればいいわけです。「失われたものを数えるよりも、残されたものを最大限に活かす」というのが、グットマン先生の教えにもあります。残された能力を活かして仕事をするわけです。また、障害はそれぞれ個人で違います。場所が違うし、その重さも違います。できることがみんな違うわけです。

だから1人でこつこつ仕事をするのではなく、自分の出来ることを出し合っているものを作るという発想が「ライン作業」につながりました。障害者の場合はできることの個人差が特に激しいですから、適材適所でやるというライン作業の性質が成功につながったのだと思います。

この様な2つの特徴に加えて、ソニーやホンダなどの企業がすごく協力してくれました。この当時(昭和40年代後半)は、先ほども言ったように、障害者が仕事をする事自体が非常に厳しい状況でした。企業が太陽の家に仕事をくれるということは、本当にチャレンジャーだったと思います。大冒険です。井深大さんや本田宗一郎さんが、直接中村先生に口説かれまして、「よし、わかった」ということで仕事をくれました。これはすごいことです。中村先生はどこ行っても気持ちで押ししていきます。この熱い気持ちで、世の中が変わったのです。

4. 障害者スポーツの動向

1975(昭和50)年にフェスピック大会が開催されました。当時は、パラリンピックもそうだったように、脊椎損傷の方たち、つまり車いすの人たちの障害者世界大会がほとんどでした。しかし、このフェスピック大会は、様々な障害の人たちを受け入れました。

フェスピックというのは“Far East and South Pacific”の頭文字を取ったもので、アジアではじめての障害者の競技大会となりました。この大会は、アジアパラリンピックに引き継がれる形で第9回までで終わりました。その際、継承されるアジアパラリンピックは、第1回からではなく第10回から行なおうという声アジアの人たちから挙がりました。そうしなければフェスピックの歴史は消えてしまいます。「フェスピックの歴史は絶対に残さなければならない」ということです。だから、アジアパラリンピック競技大会は、第10回から始まったのです。今アジアの障害者の人たちが、スポーツだけでなく、社会参加という面でも発展してきたのは、フェスピックがあったお陰だという感謝を込めて第10回から行われたということです。

1971(昭和46)年は、国際障害者年というこ

とで、「完全参加の平等」が謳われるようになりました。この年に大分の国際車いすマラソンが始まりました。車いすマラソンは今年で31回です。みなさんの周りで、32回以上行われている障害者の大会があったら、社会的に障害者スポーツの重要性が言われる前からやっているといえます。これはすごいと思ってください。当時は国がお金を出すから、障害者の啓発のために何かをするように言われて、無理やり始めた大会もあったのです。それから30回続いた大会は2割から3割ぐらいだと思います。ずっと継続することが大切だと思いますので、30回続いている大会はすごいのです。

このように、障害者のスポーツは広がりを見せました。その様な中で、車いすバスケットボールや、卓球バレー、ポッチャ等が普及していったのです。

5. 卓球バレー

卓球バレーというのは、簡単に言うと6人制ゴロ卓球です(写真2)。障害者のスポーツというのは、ゴロが多いです。2次元から飛んでくるボールを確認して打つことはやり易いからです。

コートですが、ネットの下にピン球1個半の空間を作りました。当時はピン球が38ミリでしたから、57ミリの空間があります。そして、普通の卓球はネットの上に白い帯があるのですが、卓球バレーでは下にあります。卓球バレーはこの白い帯の下にボールを通します。現在ピン玉の規格は少し大きくなりましたが、ネット下の空間は

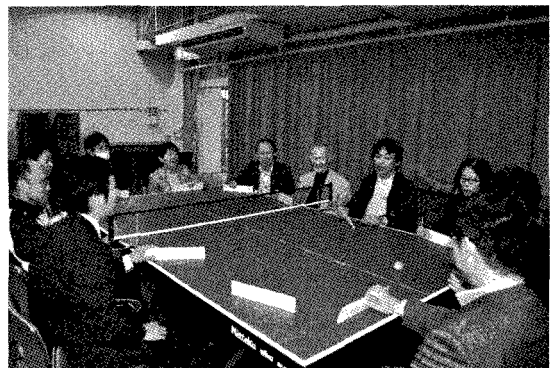


写真2 地域研究の参加者が実際に卓球バレーを体験した

57ミリのままでやっています。そのため空間は1個半よりちょっと小さいです。ボールの規格が変更された時に、なぜネット下の空間を60ミリに変えなかったかと言うと、用具を変える必要がでてしまうからです。

障害者スポーツを普及させていく中で大切なことは、同じもの、同じコートを使うことです。卓球バレーでは、共通の用具をみんなで買いました。ネットもこのために買ったのです。そういった状況で「ボールの規格が変わったから、ネットの高さを変えます」ということになったら、既に購入した人は、「道具を全部買い換えなきゃいけない」となります。そんなことをしたら、絶対に普及しません。そういう理由から、なるべくその様なことが無いようにと、ネット下の空間を57ミリのままにしたのです。

卓球バレーというのはユニバーサルスポーツだと思っています。立てる人も立てない人も、みんな一緒にプレーできます。ですから、卓球バレーは、子どもたちにバリアフリーやユニバーサルデザインを教えるのに格好の競技です。

ルールも、バレーボールとほとんど同じにして、わかりやすくしています。その中でちょっとだけ難しいルールがあります。「サーブを、ブロッカーというネット際の人には1回で相手に返してはいけない」というルールです。なぜこのようなルールがあるかと言うと、それをやり始めると、後ろの人たちにボールがこなくなってしまうからです。これだとやっていて面白くないですね。みんなにボールが回るようにということで、ブロッカーは、サーブを自分たちの味方にパスをしなればならないというルールを設けました。

さらに、サーブ権も1回ずつ変わります。サーブ権をもった人が続けてサーブを打つということはないのです。なぜかと言うと、障害の重い人と軽い人とが一緒になって行っているわけですから、障害の軽い人がサーブ権を持って、どんどんサーブを打つのは、障害の重い人にはきついことです。ですから、1回サーブを打ったら交代するというルールでやっています。こういったところに、ユニバーサルスポーツとしての理論がいっぱい詰まっているのが卓球バレーなのです。

6. 卓球バレーの普及

障害者スポーツで私がよくやる手なのですが、「卓球バレーで京都に行こう」「ローリングバレーで神戸に行こう」と参加者に呼びかけています。ほとんどの種目でそんな風にして選手を集めています。そうやる中、3年目ぐらいにふと思いました。「ローリングバレーは大分にチームがないから神戸に行くのは仕方がない。ポッチャもまだ普及していないから仕方がない。でも卓球バレーは、誰でもできるスポーツだからわざわざ京都までいなくても、大分県内で広めてしまえばいいのではないか」、そんなことを思いました。それから考え方を変えて、大分県の障害者スポーツ指導者協議会、それと太陽の家「麦の会」という自治会と一緒に普及を始めました。このスポーツは簡単だから広まり、だんだん普及していきました。今では大分県内でちょっと大会をすると、20チームぐらいはすぐに集まるといった状況にまでなりました。そういった普及に加えて、「リハビリを終えて地元に戻った障害者たちにもチームがあればいいな」という発想から、総合型地域スポーツクラブでも行えるようにしています。

総合型地域スポーツクラブは高齢化しています。卓球バレーは、「ゲートボールをするのも足が悪くて難しい」ということを言うおじいさんでも座ってできますから、にこにこしながらやります。90歳を超えた方でもできます。座ったままやっているのであまり運動量がないと思うかもしれませんが、そんなことはありません。ボールを追ったり、必死に打ったり、それと闘争心ですね。こういった部分はまさにスポーツですね。だからやる人がどんどん増えてきました。

普及するにつれて、誰が審判をするのかなどの課題も出てきます。そこで、県内で卓球バレー指導者養成研修会をして、指導者を養成しました。研修を受けた人には写真入りのプレートを首から下げてもらいます。プレートがあれば彼らが歩いているだけで卓球バレーの宣伝になります。どんどんみんなに知ってもらうという部分と指導者の養成ということを掛け合わせました。

しかし、これだけではいけないと思ひまして、日本卓球バレー連盟を立ち上げることにしました。2008(平成20)年の全国障害者スポーツ大

会の時に、オープン競技で卓球バレーをしまして、12府県ぐらいに参加してもらいました。本場の京都からも来ていただいて、その時に、連盟を立ち上げました。ただ、日本全体でこの競技をやっていくのは非常に難しい面もあります。なぜかと言うと、卓球バレーは障害の重い方たちが中心になってやりますので、移動が大変なのです。そこで移動可能な範囲で、無理なくやっていくのもいいということになりまして、翌年にはブロック制を取り入れました。まだ西ブロックと中ブロックしかないのですが、これから東ブロックを作っていこうと、今頑張っています。

西ブロックでは、大分、宮崎、鹿児島、熊本、佐賀、山口、の各県に卓球バレー協会というものを作り、その中で指導者養成をしています。卓球バレー指導者養成研修会をやっています。なぜ審判員ではなく指導者なのかというと、指導者は、普及すること、チームを育てること、指導することなどあらゆることを行います。そういったことに加え、審判もできればいいという考えです。大きな大会になった時に審判がきちり出来る人をブロック公認大会の中で審査し、「ブロック公認審判」を養成しています。現在既に60人ぐらいブロック公認審判が育っています。そういうふうにして、地方から全国組織として盛り上げていこうというやり方を行っています。

7. 普及させる上での悩み

もっと普及させて行きたいと思っておりまして、東北、関東、北陸、四国など様々な県を回っています。その中で非常に感じるがあります。障害者のスポーツを取り仕切る組織の仕組みが各県で全く違うということです。体育協会であれば、文部科学省の傘下で日本体育協会があって、その下に同じようなかたちで各県の体育協会があります。しかしながら、障害者スポーツの場合、大きく分けると3つに分類できます。「障害者スポーツ協会」がしている県、「障害者スポーツ指導者協議会」がしている県、それと「障害者スポーツセンター」がしている県といったように、各県で仕組みが違うといった状況です。その様な中、今後どのように広めて行けばいいかといった点で非常に悩んでいます。

もう1つあります。普及という立場からは非常に嬉しいことでもあるのですが、「高齢者を対象とした卓球バレーをやりたいから、卓球バレーについて教えて欲しい」という依頼が増え始めました。ただ、そうなった時に、高齢者の大会も含めて、誰が審判をし、大会を運営するのかが課題となります。今の卓球バレー協会だけで全部を取り仕切ることは非常に難しいです。

車いすバスケットなら、普通のバスケットボールをする人がいっぱいいて、その中の好きな人が車いすバスケットの審判もしてくれます。しかし、卓球バレーの場合、元々が障害者スポーツで、そもそも小さい規模なわけです。その上に健常者が乗っかってくるとなると支えきれません。ポッチャや卓球バレーは障害者の方から始まっているので、競技の中に健常者が入ってきた時に、私たちはそこにどのように関わって行けばいいのか非常に悩みます。今まで考えたことのないような、大変な事態が起きてくるのかもしれない。

8. 世界に広がる卓球バレー

私も行ったことのあるドイツについて少し話しておきます。ドイツは障害者の重度、種別に合わせてクラス分けがされています。指導者も細かく分けられています。

ドイツで最初に取り入れられたのが北九州市で始まった風船バレーです。風船バレーというのは、6人対6人でバトミントンコートを使って行きます。名前のとおり風船を使ってやるからやり易いわけです。ルールは10回のうちに6人全員が触って相手のコートに返すっていうもので、ある意味では難しいスポーツなのです。風船バレーを紹介すると、彼らは「面白い」という反応をしました。何が面白かったかと言うと、「ごちゃ混ぜ感」です。どんな障害の人でもごちゃ混ぜに入ってやるわけです。車いすの人から目の見えない人まで、みんな一緒にやるスポーツなんてドイツにはなかったので、新鮮だった訳です。新鮮だということをやっていたのですが、やっぱり危険だなということも分かったのですね。

片麻痺の人はバランスを崩し易いです。もしバランスを崩して転んだ先に車いすがあったら危険ですよ。目の見えない人も同じです。みんな一

緒になってやっていると聞くとすごく良いのですが、危険な要素も多くあったわけです。風船バレーが危険だということで卓球バレーを教えに来てくれないかということで、私たちにも声がかかるようになってきました。

アジアの国々にも、私たちは毎年3・4回行っています。私は今、ラオスに行っています。ラオスに行って様々な障害者スポーツを広めようと思っています。

日本には50年ぐらいの障害者スポーツの歴史がありますが、前半は障害者のスポーツの中に「みんなのスポーツ」という考えはありませんでした。

とにかく競技を重視してきました。そんな中、競技スポーツだけではない、という考えから卓球バレーが生まれました。その後競技スポーツとみんなのスポーツが並行して成長してきました。

その経験があるので、ラオスでこれから障害者スポーツを始めて行く際に、我々は、「みんなと一緒にできるスポーツをしながら競技スポーツを育てていく」という話をしています。ですので、ラオスでも卓球バレーを始めようという話になっています。

日本だけではなく、海外でも卓球バレーを普及していくような動きが今起こっています。